

プログラム

オープニングスピーチ

日本アイ・ビー・エム株式会社 代表取締役社長 大歳卓麻

いわゆる伝統的で局地的な公害問題に比べて、非常に長い時間軸で考える必要がある環境の問題が、このまま手つかずの状態が進めばどう影響が人類や地球全体に及ぶかという長期的ビジョンを企業も持つべきであろう。環境問題はバブル経済を体験した日本の社会がある時期抱えていた問題や、様々な面でコーポレートガバナンスが問われる企業としてのやり方そのものが抱えている問題にも共通する部分がある。IBMが環境シンポジウムを初めて開催することにしたのは、この問題がこれ以上顕在化する前に、先の展開を深く推察する機会を独自に設けたかったからである。



1960年代に一部の専門家の間で囁かれ始めた環境問題に企業が本腰を入れ始める一つの大きな契機となった1992年のリオサミットを境にして、個々の消費者の購買行為に大きな変化が現れ始め、その変化が企業の考え方にも多大な影響を与えるようになった。一方、環境に関する企業イメージや環境経営度の調査がメディアや行政機関の間でも盛んに行われるようになり、各企業がどれほど真剣にこの問題に取り組んでいるかが非常に厳しく問われるようになってきている。今回、シンポジウム開催に至った背景には三つの要因がある:

- (1) 今年の通常国会で環境庁が定めた「循環型社会形成推進基本法」に則って、環境リサイクル法、グリーン調達法や廃棄物処理法等、厚生、通産、農水や建設の各省による環境関連の法整備/強化がかなり具体的に進んだ。
- (2) 環境汚染事故が、多額の修復費や賠償金の請求、また場合によっては工場の操業停止、消費者の不買運動、株価の下落など、経営に深刻な打撃を与える恐れがあることから、環境対応をリスクマネジメントの重要事項として捉える企業が増えてきた。
- (3) IBM一社だけではなく競合企業も含めた環境問題の関係者全員が、一致協力した形で新しい社会を創出しようという機運が日増しに高まってきた。

環境対応策に関してIBMは、世界共通の環境ポリシーを策定し、事業活動、販売、製造、開発からサービスに至る迄、非常に多岐に亘る具体策を講じ、環境に与える負荷の軽減やこの問題の抜本的な改善に繋がる社会貢献や環境関連の情報開示なども積極的に進めている。IBMの環境ポリシーの大きな特徴は、工場内の地下タンクを地上に上げ、その下にプールを造るといった地道な作業から、環境問題を経営問題として捉えた環境会計の創設、80年代後半から世界各地の自社工場毎に集め始めた環境データの査定評価、世界初のISO 14001の統合認証の取得に至る迄、様々な先見的な経営判断を生んできた点にある。

IBMでは、ITとインターネットをベースにした「e-business」なるものを提唱しているが、これもサプライチェーンをはじめとする各種企業活動の効率化や情報化を進め、消費型から循環型/情報型の社会に変革していくことで、間接的に環境保全に貢献できると捉えている。

経済活動や人間の営みに多大な影響を与えた産業革命は、ワットが蒸気機関を発明した1769年を発端に、それから大体50年後に社会基盤の一大変革をもたらした。自動車も同様に、1885年にドイツ人のダイムラーベンツが開発してから約50年後に本格的な普及が始まり、社会経済的な活動に不可欠な産業基盤へと発展していった。IBMが携わっているコンピュータとは言えば、奇しくもちょうど今が、原型モデルと言われるENIACが完成した1946年から約半世紀経過した時期に当たる。

IBMでは先だってコンピュータを社会基盤と捉える発想を通じて、現在e-businessという新事業形態に移行し、消費型から循環型/情報型の社会へと衣替える転換期に差し掛かっていることを示唆した。今は正にIT革命の黎明期で、従来困難だったことを何でも容易にする万能ツールとしてはまだまだ未熟なITを、誰でも必要な時に必要なだけ使える正真正銘の社会基盤にしていくことがIBMの今日的な使命だと考えている。

PCやインターネットの利便性が進み、24時間/365日、世界の何処にいても仕事ができるようになること自体、素晴らしいことだが、人間が果たしてそれを求めてきたと言えばそうではなく、やはり地球をもっと優しく豊かな生活の場にするのが優先されるべきだという意味から、日本IBMでは全社員が共有できるビジョンの一つとして特に「人と地球に豊かさや潤いをもたらす」ことを重視している。

経済発展と環境保全を両立させることが、21世紀に目指すべき全人類共通の大目標であり、IBMとしてはe-businessという強力なエンジンを駆使して環境という分野でも社会的リーダー役を果たしていきたい。その意味でも今回のシンポジウムが、非常に活発で充実したセミナーとディスカッションの場になることを期待して止まない。